

輝け 商店街

近江商人の道・2

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

近江商人を生む風土

近江の地名は淡水から転じたもので、京都に近い淡水の琵琶湖、「近つ淡水」という意味だ。これに対し遠江は浜名湖、遠州静岡をさす。律令時代（七〜一二世紀）には、東海、北陸、東北、山陽などの七道の官道が整備され、三〇里（一六キロ）ごとに駅家が置かれた。琵琶湖の西には東山道が通り、五個荘には「清水駅家」があった。古くから多くの人が通り、物資が運ばれ、沿線には早くから市庭（市場）が開かれた。

莊園市場で税を納め 商業権利が認められる

近江は京都や比叡山に近い。古くから国に納めた貢租の一部が放出され、貴族や社寺に寄進した莊園の生産物とあわせて、社寺の門前で市が開かれた。

交通の要所や莊園の役所でも、莊官や名主が責任者となって販売され、その拠点が定期市となっていった。

近江の八大市と呼ばれる大きな市が開かれた。愛知郡の真野市、粟津市、伊香郡の伊香具市などである。その周辺に小市ができて、定期的に開かれる市を渡り歩く商人が現れた。彼らは市座や商座などの仲間をつくり、市奉行などに市庭税を納めて、商いの権利が認められ庇護を受けた。

湖東地方には、延暦寺の莊園が多く、寺や神社に保護されて市が発達した。今堀日吉神社の文書に見る保内座商人もその一つで、呉服座、紙座、塩座などがあり、近江国全域での販売権利をもっていた。

湖東三山の仏像を作った渡来人

琵琶湖周辺には、古いお寺が多

い。湖東三山の百済寺は聖徳太子の創建になる古刹で、百済の僧が住職だった。金剛輪寺は天平二年（七四二）に、西明寺は承和三年（八三四）に創建され、それぞれに古い仏像が祭られている。渡來人の手になるものも多く、深い関わりが偲ばれる。紅葉の季節には、たくさんの観光客でにぎわう。

江戸初期には徳川幕府の全国統一と共に、各地に城下町の建設ラッシュが起こり、商業活動が活発になる。

近江商人は、こうした時代背景のなかで生まれ、行商と出店を基本として成長した。のちには廻船業にも進出し、多くの成功者を輩出し、江州あきんど、江商とも呼ばれた。

中世から近世に 流通・情報の拠点へ

中世になると、農業や手工業が発達し、商品の流通が始まり、近江では、各地の産物を送る馬借、問丸などの運送業も起こった。

湖東地域は、伊勢へ通じる八風街道、琵琶湖を経て若狭に向かう九里街道、京都へ向かう東山道などが合流し、流通と情報が行き交うメッカとなった。

江戸時代には、東海道、中山道、甲州街道などの五街道のほかに、脇街道も整備され、街道沿いに宿



藤井彦四郎邸にある天秤棒の商人像

農民の活路の行商

近江は琵琶湖が真ん中にあり、周りは山に囲まれている。湖岸は水害に悩まされ、山間の地は干ばつに苦しんだ。人口は多いが農業の収穫が少なかった。湖東三郡の貧しい農民たちが行商などの商業に活路を求めるといふ環境にあった。しかし、江戸期以降に入ると、比較的余裕のある農民が商いを兼業し始め、次第に大規模に展開していく。城下町での商業や各藩の財政にも関わりを持ち、大きく成長していく者も出た。

武士からの転職

近江商人のなかには、武家の出身と言われる者も多い。たとえば、近江源氏佐々木六角の家臣から出たとされる、八幡の西川伝右衛門、市田清兵衛、西川利右衛門。蒲生家の家臣の出という日野商人の鈴木忠右衛門、中井源左衛門、外村宇兵衛などである。江戸時代の近江地方は、およそ一四〇余の知行地に分かれていた。幕府の直轄地や旗本、諸藩、公家、寺社などの領地があった。転封や廃

城、主家の没落などで武士を離れて商人へと転職した者も多かった。

異なる地域商人群の活動

近江商人は、地域ごとにグループを形成し、それぞれ異なった発展形態をたどっていく。初期の近江商人の顕著なものに、五個商人と四本商人がある。

五個商人は日本海側へ

五個商人は、琵琶湖の東側にある八坂、薩摩（彦根市）、小幡（五個荘町）、田中江（近江八幡市）と西側にある高島南市（安曇川町）の五地区からでた商人群である。今津から小浜に至る久里半街道のルートに沿って、湖西から若狭、越前など日本海側へと商いを広げ、海産物の移入販売に従事した。

四本商人は山越えて太平洋側へ

四本商人は、小幡、保内（八日市市）、沓掛（愛知川町）、石塔（蒲生町）の四地区出身の商人たちで、太平洋側の伊勢や桑名へと商いに、塩や海産物や麻苧、木綿、紙などを仕入れて、広く各地に行

商した。

関所を避けて、八風・千草の両街道から鈴鹿山脈を越えるルートを開拓し、室町時代には何百人のキャラバンを編成し、傭兵に守護させながら輸送にあたるほどの勢力をもっていた。山を越えて行商したので「山越四本商人」とも呼ばれた。

小幡商人は双方兼ね幅広く活動

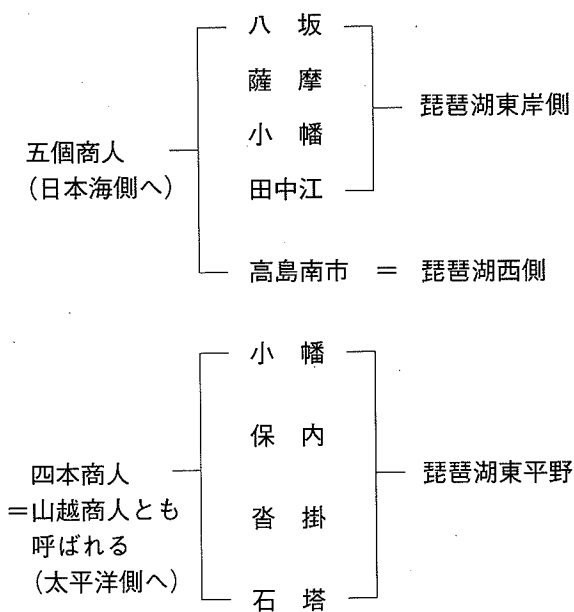
このように地域グループによって異なる活動が展開されるなかで、

五個商人と四本商人を兼ねる唯一の商人団として小幡商人が活躍していた。

小幡は、神崎郡の愛知川宿と武佐宿の間の五個荘の部落で、旧中山道（東山道）と伊勢とを結ぶ、近道が分岐する交通の要衝という地の利を得ていた。広い通商圏での仕入と小売の流通機能を持ち、幅広い商品を取り扱っていた。

戦国時代に入ると、独占的地位を失い、安土や八幡城下に移住して八幡商人となる。

五個商人・四本商人の地区



てんびんの里 五個荘

東近江市五個荘は五個荘商人の発祥の地である。

五個荘商人は、小幡商人などの流れをうけて、江戸時代後半から昭和にかけて、呉服や木綿・絹織物を中心に扱い、革新的商法で商圏を全国に広げ、京都・大阪・東京・北海道をはじめ、朝鮮半島にも進出している。

五個荘金堂出身の商人は、外村与左衛門・外村宇兵衛・外村市郎兵衛・塚本喜左衛門・中江勝次郎など、大正末期で一九人を数える。商人たちは、郷里の金堂を離れることなく、本宅を守り続けた。進んで社寺や公共のために出資した。今も豪華な商人たちの本宅が建ち並ぶ。船板塀の家や白壁の土蔵の側を小川が流れ、集落全体が均整のとれた格調のある街並みが残されている。今日のまちづくりの教訓となる。

平成一〇年に、国の重要伝統的建物群保存地域に選定された。

外村与左衛門 行商から麻布製造卸へ

金堂出身の外村与左衛門は、農

民から商人となり、成功した一人である。

外村家は、金堂村の上層農民であった。同家の五代目与左衛門は、元禄一三年(二七〇〇)、一九歳で初めて商売を試み、布問屋から布一駄を前借りして、姫路・大坂に売りに出るが失敗する。二一歳で借金をして、織機を手に入れ麻布を製造し、近辺の販売から始めて、次第に名古屋まで行商を重ねる。

辛苦の末、享保九年(一七二四)には、業界に「布商人」として記されるまでに成長した。

以後代々「布屋」「近江屋」を名乗って営業を続け、現在の外与株式会社は一六代目に当たる。年商二三〇億円、日本きつての老舗である。

指定文化財の 藤井彦四郎邸

藤井彦四郎(一八七六―一九五六)は、近江商人の三代目、藤井善助の次男に生まれた。

日本で初めて人造絹糸や「小町糸」を発売し、「スキー毛糸」を製造販売するなど、先進的な経営で成功をとげた。不況の時にも「現状維持は退歩」と積極経営を進め、共同紡績など、多くの会社をおこし、中国にも進出した。



藤井彦四郎邸(近江商人屋敷)

邸宅の敷地は八一五平方メートル、琵琶湖を模した池を中心に、回遊式の大庭園があり、主屋、客殿、洋館、土蔵が建ち並ぶ。

日常生活の空間は、質素で儉約を旨とした暮らし向きが漂う反面、客殿は豪華で、お客を大事にする近江商人の心意気が偲ばれる。

施設は国の登録文化財や県、市の指定文化財となっている。

富が続く智恵と仁愛

藤井彦四郎邸にある二枚の団扇に、次のような家訓が書かれていた。
富久者有智、遠仁者疎道。

節分の豆まきに言う「福は内、鬼は外」をもじって表現し、「富が永

く続く人には、正しい才智がある。仁愛をもたない人は、正しい道が理解できない」とし、解説している。商いを成し遂げるには、智恵や才覚に加えて、人に対する思いやりと、仁義や道徳という、倫理性と人間性が必要であることを、見事に説いている。



富久者有智の家訓を書いた団扇

富久者有智 遠仁者疎道

藤井彦四郎家家訓